



# 父と娘

---

女性はブラックホール

---

春日信彦

---

## 万引き事件

夏休みに入ると例年ならば研究室でロボ助手のキャサリンと宇宙についてだべっているのだが、今年の拓也は書齋にこもり田舎に帰ってからの計画を立てていた。ドクターの紹介で博多区にある大手予備校の数学講師の職が本決まりになり、初めて感じるほんわかした心に浸っていた。手始めに大型二輪の免許を取るために自動車学校のホームページを眺めていると、一昨日の野駄教頭の間抜けな狸のような顔が浮かんできた。

一昨日は瞳に頼まれ、麗子の妹、理恵が通う聖心女子中学校に出向いた。事の次第は理恵の万引き事件であった。この中学校は多額の寄付金を要求する中高一貫校のお嬢様学校であり、桂学校法人系列の一つである。桂コーポレーションは原爆の材料となるプルトニウム239を製造販売する世界的な武器製造企業である。一方、教育産業においても多額の投資を行っていて、自社に送り込む優秀な人材を育成している。

瞳は万引き事件をもみ消すには自分では役不足と思い、拓也にお願いしたのだ。身内でない第三者がでしゃばるのは、逆にことをややこしくしてしまうのではないかと乗り気ではなかったが、万が一、理恵が退学にでもなったら今まで払ってきた多額の寄付金が水の泡となってしまうと涙目で悲しむ瞳の姿を見ては引き受けざるをえなかった。もし、この件で寄付金を要求されたならば素直に「お受けいたします」と丁寧に応答するように、念を押されていた。

中学校の正面玄関の左手にある受付に挨拶すると教頭に面会したい旨を伝えた。しばらくするとひょろっとした背の高い陰険な男が靴音を鳴らしてやってきた。金縁の眼鏡をかけた42,3歳と思われる男は上から目線で睨みつけるように拓也を見下ろした。教頭は予約されてない業者とは面会しないと強い口調で言い放ったが、低調に頭を下げて今回事件を起こした北原理恵の件で謝罪に伺いました、と小さな声で申し出た。

一瞬、教頭は顔をひきつけると再度名前を確認した。その件に関してはどなたとも一切面会しないことになっていますと教頭は早口に言ったが、しばらく待つようにと言って小走りに校長室に飛び込んでいった。教頭は鬼の首でも取ったような手柄話でもするかのように口元を右上に引き上げ、校長のデスクの前に立つと笑顔をつくりささやくように話した。「万引き見張りのバカ北原の叔父さんというのがやってきました。いかがいたしますか？」

校長は雑誌プレジデントの表紙を飾った桂会長のアップから目を離すと、またか、と言う顔をして大きく胸を張った。「この件に関してはお話しすることはできません、といつものように追い返しなさい」校長はにんまりと教頭にささやいた。「いつもの手ですね、はい」教頭は校長に一礼すると玄関に向かった。拓也は追い返されるのではないかと覚悟を決めていたが、瞳の涙眼を思い浮かべると土下座してでもお願いする決意を固めた。

「関拓也さんとおっしゃられましたね、申し訳ありませんが、校長より例の件に関しては職員会議で決定いたしますので、今日のところはお引き取りくださいとのことです」教頭は寄付金を払えば軽い処罰で済ませてあげましようと言うようなにやけた顔をした。拓也は要求される寄付金を払う覚悟で出向いていたので、腰を90度に折って頭を下げた。「お願いいたします、5分でもかまいません、校長に面会お願いします」拓也は丁寧にゆっくりと声を発した。

教頭はうまく行ったといった顔を見せると「このことは他言されないように」と言って応接室に案内した。案内された拓也は白いソファに腰掛けると借りてきた猫のように小さくなって壁の校訓に眼をやった。どうでもいいような教訓であったがあまりにも時代錯誤の教訓に噴出した。この学校は“日本を代表する女性を育成する”と言ったうたい文句でテレビ雑誌に登場し、桂コーポレーションの売名に貢献している。

～ 校訓 ～

- 一、処女を宝とし、清い身体で恋愛しなければならない。
- 二、学問と芸能活動を両立させなければならない。
- 三、学校の名誉のために日々研鑽をしなければならない。
- 四、桂コーポレーションの発展のために最高の技術を習得しなければならない。
- 五、目上に対し、ため口ではなく、敬語を使わなければならない。
  
- 六、教師との恋愛は決してあってはならない。
- 七、妊娠した場合、決して墮胎をしてはならない。
- 八、子供は託児所に預け勉学に励まなければならない。
- 九、四ヶ月に一度の健康診断を必ず受けなければならない。
- 十、神への感謝を心がけなければならない。

暇つぶしに、拓也はメモ帳を取り出すと校訓をメモった。今最も若者に指示されている、ミュージカルユニットKTR48は桂コーポレーションのヒット作品になっていた。KTR48は脱原発と題した公演を全国各地で行い好評をえているが、桂会長の矛盾した行動に納得がいかなかった。プルトニウム製造のカモフラージュをやっているようで気に食わなかった。

拓也が大きなあくびをしていると、ノックが三回なった。目をギョロッとさせた教頭は入ってくるなり、「桂会長と対談された数学教授の関様でいらっしゃいますね」教頭は拓也の右斜め前に腰かけるとコーヒーを差し出した。「はい」拓也は身元を明かしたくなかったが、嘘をつくわけには行かなかったので素直に返事した。

教頭は顔を青くすると手を震わせ腰を引きながら出て行った。校長室に戻った教頭は雑誌に眼をやり、唇を青くして言った。「この方ですう」教頭は大きく頭を垂れた。「そうか、好都合だ、しっかりゴマをすって、おもてなし、しなさい」校長は会長と一緒に写っている表紙の拓也を指差すと、笑顔で立ち上がり教頭の方をポンと叩いた。

「それが・・・関様に失礼な態度を取ってしまいました、いかがいたしましょうか？」教頭の手が震えていた。「え、関様は桂会長の知り合いだぞ、もし、会長に告げ口されたらお前は首だぞ」校長は教頭の両肩を掴むと大きく揺さぶった。「どうすればいいのでしょうか？」教頭は涙目になってきた。「北原さんは単にその場に居合わせただけで、今回の事件とは関係ありません、と言ってお見送りしなさい」デスクに戻った校長は目を閉じてしばらく考えた。



校長は右袖の引き出しから封筒を取り出すと、封筒に札束を押し込み教頭に手渡した。「お車代と言って、これで失礼をお詫びしろ、いいな」校長は拓也とは会わないことにした。応接室のドアを軽くノックすると、教頭は静かにドアを開けた。忍者のように足音を立てずにソファまで来ると「先ほどは大変失礼いたしました。北原理恵様の件ですが、当方の勘違いで、まったく事件とはかかわっておりません。叔父様にはご心配をおかけいたしまして、まことに、申し訳ございませんでした」

拓也があっけにとられていると、そっと腰かけた教頭は内ポケットから封筒を取り出した。「どうぞ、お車代としてお受け取りいただけますか」拓也の前に封筒を差し出した。拓也は賄賂を手渡されているようで気が引けたが、教頭のムカつく態度を思い出すと封筒を手にした。ほっとした教頭は、「お車をお呼びします」と言って笑顔で部屋を飛び出していった。

しばらく待っていると、作った笑顔で応接室に入ってきた教頭が正面玄関前につけた黒のセンチュリーまで案内した。拓也は“核の未来”についての桂会長との会談がこんなところで役に立つとは幸運だったと、心の底で微笑みながら車に乗り込んだ。理恵の件は丸く収まったことを携帯で瞳に報告すると、瞳は涙を流して喜んでいた。ただ、理恵が本当に万引きグループの一員であったのならば、と思うと心配でならなかった。

## 理恵の思い

今日は瞳と理恵がやってくる日であった。時間がはっきりしないため、外出せずに書斎にこもっていた。5時を回ったころ勢いよくインターホンが鳴ると理恵のカワイイ声が飛び込んできた。「パパ、理恵ピョンだよ～ん」理恵は開錠しておいたドアを勝手に開けると靴もそろえずにキッチンに上がり込んだ。無愛想な瞳の声はなかった。不思議に思った拓也がキッチンを覗いてみると理恵がフリッジを開けてキョロキョロしながら物色していた。

「ママは？」拓也は訊ねた。「ママは急用ができて来ない」理恵はそっけなく答えた。「そうか」がっかりしたが元気な理恵の姿に安心した。「もしかしたら、お姉ちゃんが来るかも？」理恵はトマトジュースをグラスに注ぎ喉を鳴らし飲み始めた。「食事はまだだろ？」拓也は一緒に外食する予定にしていた。「まだだけど、買いたいものがあるから、チョッと出る」理恵は笑顔を送ると飛び出していった。

瞳には3人の子供がいる。長女の麗子、長男の達也、次女の理恵。麗子と達也の父親は同じであるが理恵の父親は違う。二度の結婚は破局に終わっていた。子育ては母親にまかせて瞳は水商売を続けた。理恵にいたっては育児放棄をしてしまった。発見が遅れていたならば、理恵はここにはいなかったことになる。今でも瞳には数人の男性がいて、資金援助を受けている。瞳は波乱万丈の人生を送ってきたが、拓也のことは一度も忘れたことはなかった。

結婚を望んでいる拓也は三人の子供と親しくなるための努力を続けている。三人の子供たちは拓也をパパと呼び、ほぼ父親として受け入れてくれているが、瞳は結婚には今ひとつ乗り気でない。ともあれ、正式な結婚にいたらなくとも拓也はそれなりに満足していた。麗子は高校時代暴走族の一員であった。一度、警察に補導されたとき、拓也は引き取りに行った。

達也の高校卒業のときも、叔父として式に出席した。理恵の万引き事件においても父親の気持ちで解決に向かった。だが、瞳の心は依然としてはっきりしなかった。瞳とは夫婦同然の関係にあるのだが、心は拓也が掴むことのできない幻であった。拓也が近づくと離れ、離れると近づいてくる不思議な瞳の笑顔は、拓也をいつまでも見守ってくれる女神であった。

理恵が飛び出してから約2時間が経ったころ突然ドアが開いた。理恵と麗子がどやどやと走りこんできた。「ただいま、エサだよ～ん」理恵がスーパーの袋をテーブルの上に放り投げた。「もっと、丁寧に置きなさい」拓也は苛立ちを抑え切れなかった。理恵はまったく聞く耳を持っていなかった。麗子もがさつだが、理恵にいたってはあきれほどの振る舞いであった。言葉にも動作にもしつけと言うものがまったくなかった。

「ママの言いつけ通り、最高級蕎麦を買ってきました」少し丁寧に言い直した。拓也が笑顔を見せると二人は食事の準備を始めた。気を利かせた拓也が書斎に戻ると理恵お気に入りのAKBの曲が流れてきた。ノートPCのニュースを読んでいると携帯が振動した。瞳からであった。「ごめん、急用ができていけない」とそっけない瞳の言葉が聞こえるとすぐに切れてしまった。

「パパ、できました」エプロン姿の理恵が書斎にやってきたと思うと、すぐに引き返した。拓也がキッチンに行くとテーブルの真ん中にバースデーケーキが輝いていた。ケーキには14本のろうそくの炎が揺れていた。「あ、理恵ちゃんの誕生日だったね、パパ失格だな」拓也は頭を掻いて椅子に腰掛けた。三人で誕生日の歌を歌うと拍手の中で理恵は口を尖らせ炎を消した。

「パパがいる誕生日っていいね」麗子が理恵に微笑んだ。理恵はニッコリすると涙目になっていた。万引き事件が丸く収まったのは拓也のおかげであることを瞳から聞いていたに違いない。理恵は言葉には表さなかったが、笑顔で感謝していた。麗子と達也は父親がいた時期を過ごしたが、理恵は物心着いたとき父親がいないことを知った。拓也と出会って初めて甘えられる父親を経験した。

理恵の拓也への乱暴な態度は精一杯の甘えであり、愛情であった。理恵は拓也を本当の父親と思ひ込もうとしていた。食事を終えると拓也はシャワーを浴びる準備を始めた。パジャマに着替えた拓也はバスルームに入っていった。二人は食事の後片付けを終えると麗子が理恵に何か話しかけていた。理恵が頷くとバスルームにかけていった。「パパ、理恵が背中流してあげる」言い終えると服を脱ぎ始めた。

「お待たせ～」裸の理恵は笑顔で拓也の後ろにやってきた。拓也は断るにも断れず、ありがとう、と言って小さな椅子に腰掛けた。拓也はタオルを前かけ、その上に洗面器を載せて両手でしっかり押さえた。「パパの背中大きいね」シャボンをつけたスポンジで背中を壁でも洗うようにごしごし洗い始めた。拓也はどんな話をすればいいか戸惑ったが、ぎこちなく「パパって言われると嬉しくなるよ」と話をつないだ。

理恵はシャワーのホースを手にとると頭から冷たい水を浴びせかけた。「お～」拓也がびっくりした声を上げると理恵はケラケラ笑って頭のシャンプーを始めた。頭の泡を手にとると拓也の口やほっぺに塗りつけて、からかっては大きな笑い声を上げた。拓也もいたたまらなくなりバスに飛び込んだ。バスから見える理恵の裸は瞳とはまったく違った妖精であった。

拓也が洗面器で前を隠しバスから出るとすぐに着替えキッチンのテーブルに着いた。ミッキーマウスのプレートには缶ビール、グラス、板わさ、おきゅうと、冷奴がセットされていた。麗子は拓也の好物を良く知っていた。グラスにビールを注ぐと麗子もバスに向かった。麗子は一回り大きくした瞳のようで、まさにそっくりである。理恵は父親に似たのかあまり瞳に似ていない。性格も明るくダイレクトでがさつではあるが、とても愛想がいい。



バスからは二人の黄色い声が頻繁に聞こえてくる。女の子にとってはすべてのことが楽しい話題になってしまう。いつも一人でいる拓也にとって、二人の訪問は楽園に連れて行ってくれたようなプレゼントであった。拓也はビールを飲み終わると瞳の携帯に電話した。携帯はきられていた。二人は笑いながらバスから出るとパジャマに着替え、麗子がドライヤーを片手に理恵の長い髪をブローし始めた。

拓也はタクシーで帰るものと思っていたので、キッチンで二人が部屋から出てくるのを待っていたが、出てくる様子がないので声をかけた。「何時ごろ帰るんだい？」拓也はドアの外から二人に声をかけた。「今日は泊まるよ」理恵の声が即座に返ってきた。拓也は「そう」といってキッチンに戻り、ブランディーをサイドボードから取り出した。音を響かせながらグラスに注がれた琥珀色の液体をじっと見つめていると、昨日のことが脳裏に浮かんできた。

## 女性はブラックホール

研究室でお世話になったキャサリンを磨いていると突然杏子が飛び込んできた。「ハ～イ、先生おひさですう～」杏子の間の抜けた挨拶が耳をくすぐった。いつもの超ミニスカートではないベージュのスーツを着た杏子がしおらしく頭を下げた。「どんな事件が起きたんだい、その格好は？」笑って杏子の服装をじろつとなめるように眺めた。「先生ったら、今日はラッキーな報告にやってきたんです」勝手に椅子に腰掛けると拓也に椅子を勧めた。

また、いつものくだらないエロ話を聞かされると思い、腰を落とすように椅子に腰掛けた。「先生のおかげで、就職が内定したんです。中堅の雑誌社に。先生に真っ先に知らせたいと思って飛んでやってきました」杏子の大きな目は飛び出していた。「ほう、それは良かったね」拓也は笑顔を作り、まともな話にほっとした。「後は、先生の単位があれば無事卒業できます」真剣な顔で拓也を見つめた。

「まあ、君の頑張り次第だよ。答案を見れば君の努力はおのずと見えてくる。頑張るんだね」冷たくあしらった。「私、数学に目覚めたんです。今日は宇宙における数学の話をしてします。聞いてください」杏子は真剣になっていた。「宇宙における数学ね～、確かにまともな話のようだけど、参考までに聞いてみるか」拓也は杏子の話を信用していない。

この話は内定した雑誌社に持参した「宇宙における男と女」と題した小説の一部であった。このことを隠して適当に数学と言う言葉を挟み話し始めた。「先生、宇宙にはブラックホールと言うのがありますよね。このブラックホールは解明できないような重力が働いていて、光も空間も曲がってしまいますね。そして、いったん、吸い込まれると二度と脱出できませんね」杏子の表情は次第に固まってきた。

「確かに、ブラックホールは物理的にも謎が多く、数学的には解明できない代物だね」拓也は杏子の口からブラックホールという言葉を見て少し感心した。「そこで、ブラックホールは地球上の生物にたとえるとなにに当たると思われますか？」杏子は質問した。「地球上の生物にたとえると？う～～、なんだろうな～～」拓也がしばらく黙っていると「それは女です」杏子が答えを言った。

「へ～、杏子さん、オリジナルの発想かな」拓也はまた騙されたと思った。「ブラックホールは女、光が男なのです。どんなに早く突き進む光もブラックホールに近づくと曲がってしまうのです。それほど、女は不思議な力を持った宇宙の生物なんです。しかも、ブラックホールと同じように、女は物理的にも数学的にも解明できない謎の生物なんです。女を解明することはブラックホールを解明することにもつながるのです」杏子は顔を拓也に近づけてきた。

「なるほど、それは小説であって、数学とは関係ないようだね。話としてはおもしろいけど」拓也はいい加減にしてくれと言わんばかりの顔をした。「先生はせっかちですね、これからが数学なんです」杏子の目が血走ってきた。「どれどれ、続けてくれ」拓也はあきれて天井に眼をやった。杏子は目を輝かせると話し始めた。

「虚数の世界がありますね。これはブラックホールであり、女の本質なんです。 $i * i = -1$  これは何を意味しているのでしょうか。愛し合うことは非現実の世界に突入することを意味しているのです。ガウスはきっと失恋から立ち直ろうとしたとき、愛の本質を発見したのです。男は実数、つまり現実。女は虚数、つまり非現実。ガウスは宇宙が現実と非現実から成り立っていることを発見したのです。宇宙は膨張し続けながら、縮小し続けているのです」杏子の妄想はピークに達していた。

拓也は大きく頷くと「わかった、君の熱意は十分伝わった。この話は成績に加算することにする。もう、この辺にしておこう」拓也はどっと疲れた。杏子はこの言葉を聴いてとたんに顔が明るくなった。「先生はさすが一流の数学者ですね。この話を理解して下さるなんて、先生大好き」拓也に飛びつきそうになった杏子をとっさに避けると、立ち上がり激励の言葉をかけた。「芥川賞を取ったら報告に来てくれ」拓也は杏子の肩をポンと叩くとドアに案内した。

拓也が二人に声をかけた。「パパは寝ます。朝は6時に起こすからね」拓也がドアから離れようとするすると理恵の声が返ってきた。「パパ、一緒に寝よ～、三人で仲良く」ドアが開くと理恵は拓也の手を引っ張り込んだ。「パパが真ん中で二人が両端に寝るの。お話ししながら寝よ～」三人は川の字に寝ると拓也は日本昔話を話し始めた。

## 父と娘

<http://p.booklog.jp/book/54095>

著者：サーファーヒカル

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/novel8686/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/54095>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54095>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ